

言 頭 卷

経営学部教授 照 屋 行 雄

いまだ温もりの残る前世紀は、平和と幸福を希求しながら、戦争と病災に苦しんだ100年であった。しかしながら、貧困と差別に脅かされながらも、繁栄と自由を達成した100年でもあった。その波乱の20世紀が時代の歴史となって走り去った。2001年の元日よりスタートした新世紀が、この宇宙船地球号とその乗組員にとって、限らない繁栄の100年となることを祈りたいと思う。

さて、この21世紀の扉を開く重要なカギの1つとなったのは、IT（インフォメーション・テクノロジー）革命である。現代の社会生活や企業経営に押し寄せる IT 革命の波とそれが開く未来の可能性について考えてみたいと思う。IT 革命の歴史的意義は、それに対する期待と可能性を含めて考えれば、産業革命と情報革命が融合したものに匹敵する大規模なものとみることができる。ワットの蒸気機関に始まる産業革命によって産業社会が変わったときよりも、また、グーテンベルクの印刷技術に始まる情報革命によって市民社会が変わったときよりも、IT 革命のインパクトははるかに大きいと言わなければならない。

IT 革命は、文字どおり情報技術による社会・経済システムの変革のことである。したがって、そこには少なくとも3つの特徴を認識することができる。まず第1には、IT 革命は筋書きのないドラマであるということである。われわれは今、100年に一度か二度の大きな技術革命に遭遇しているといえよう。革命前夜に書いたシナリオは、その革命の広がりや深さが大きければ大きいほど、いざフタを開けてみれば狂うのが歴史の教訓である。IT 革命の展開がシナリオどおりにいかないとはいえ、この時代の大波に乗り遅れる企業や個人は、いずれ取り残されることを覚悟しなければならない。

次に第2には、IT 革命にあっては主役の交代があるということである。フランス革命や日本の明治維新にも主役の交代があったように、IT による革命にも大きな主役の交代が期待される。インターネットの巨大隕石説によれば、あたかも巨大隕石の落下により恐竜が絶滅したとされるように、従来型の巨大

企業は死滅するか大きく後退する運命にある。これは企業革新への警鐘であるが、従来脇役であった中堅中小企業や中・下位クラスの個人の中から、主役が輩出する時代の到来である。

そして、第3の特徴としては、IT革命が進展すれば弱者は生き残れないということである。企業間競争にあっては、強者と弱者の差が決定的となり、弱者はサバイバルできないという厳しい現実には直面するのは明らかである。ここではデジタル・ディバイドということが起きるのである。政府や大企業の庇護のもと、企業自身の変身無しに何とか生き延びることができた時代は、すでに遠い過去の話となった。

1990年代は、経済でいえばアメリカの“蘇った10年”に対して、日本は“失われた10年”といわれる。この間、日本企業はひたすら財務的・物的リストラと人的リストラ、さらには企業結合（M & A）を繰り返して生き残りをはかってきた。これからの10年は、広範の企業がインターネット対応あるいはIT対応を戦略的課題として取り組むことが強く求められる。IT革命による日本企業の革新は、21世紀における日本経済の行方を左右するばかりでなく、日本国それ自体の運命をも決定するファクターとなるように思われる。